不幸な？姫の？物語？

気晴らし作品投稿者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
不幸な?姫の?物語?

【Ｎコード】
Ｎ５７２８Ｍ

【作者名】
気晴らし作品投稿者

【あらすじ】
主人公が上流階級で不幸な目に合う、短めのコメディー?小説です。
本当は、今書こうとしてる、シリアス系の話が詰まってて、気晴らしにギャグ風に書いた作品です。
ネタバレになるので、その作品を投稿できたとしても、ここでの紹介はしないです。
あと初投稿なので暖かい目で見守ってください。

第一話　クズとカスどっちが汚いか

「あのままでは、私目（ワタクシ）の大きな失態になるところ、女神のような自愛によって助けていただき、まことに本当に感謝します」
てめ～のためじゃね～よ。寒気が走るクズ野郎の言い回しにそんなセリフを言いそうになるのをこらえながら
「どうしてこうなったかな～」そんなことを考えた

外での食事に行くはずが、お父様と、お母様の計略にはめられ着いたのは、
外『のパーティー』での食事だった。
そこで有力貴族の息子に口説かれていた。
「貴方の絶世の美は、普通の宝石では飾ることができない。だがボクの財を持ってすればそれは可能だろう」
「いやそれお前の財じゃないから、親の財だから」とは流石に有力貴族のカス息子には、言えず。
「それは貴方の過大評価だ。俺はそんなにもすごい者ではない」
などと、汚い言葉で自分の評価を下げることで必死に対抗していたが
「そんな蔑まなくてもわかってます。どんなに包み隠そうとも貴方の中心で輝き続ける金のような美しさは、金のようなボクにはわかってしまうのです」
「お前はメッキだろ」ともいえず、カス息子が熱弁をしながら腕を振った時。
「あっ」
っと声とともにガシャーンと割れる音がした
横を見れば給仕の少女と、落として割れスープの皿があった。
また、バカ息子の袖口が少し汚れていた。
そうして、バカ息子は怒鳴った。
「何て事をしてくれるこのバカ給仕は！この服一着いくらすると思

ってる！彼女のためにあつらえた一品の品だというのに！お前の給料では到底変えるものでないのだぞ！！」
そのような怒鳴り声が続く。
少女は、「すみません、すみませんと」土下座をし続ける
それでも怒り続けるカス息子はこう言ってしまった。
「お前のようなものがいるのは世のためにならない、首を切り落としてやる！！」
そう言って少女の髪をつかみひきずって以降としたその姿を見て流石にキレた
ヴァシャ
カス息子に近くにあったスープ皿の中身を掛けた。
「な！！」
「すまん、手が滑った」そんなわかりきった嘘をついた。
「あ～もしかしてあれか、俺も首を切り落とされてしまうのか？」
「あ、いや、そんなことは」と状況についけずも否定はした。
「あ～よかった。すまんな～手が滑ったもので。ところで彼女は君のどこを汚してしまったんだい？」
「それはボクの腕の・・・・・」
「なんだ、俺が汚してしまった腕を見せて、やっぱり俺は首切りなのか？」
「いや、あの、その・・・」
「そんなことよりも、そのままだと風邪を引くぞ？今日はさっさとかえってフロでも入って寝ることをオススメする」
そうしてカス息子は自分の従者に連れられてパーティーを退場していったあと。
「我家の者がとんだ語迷惑を」
と、クズ野郎が話しかけてきた。

第一話　クズとカスどっちが汚いか（後書き）

このような駄文を最後まで読んでいただき感謝感激です。
なにぶん、このように人に自分の書いた小説を他の人に見せるのは初めてなので、どうなのかすごく気になってます。
ダメならダメでいいので素直な感想をいただければ幸いです。
また、うまく編集できているか心配です。
ご指摘いただければがんばって直して行きたいと思ってます。

第二話　田舎の母ちゃんも泣いてるぞ、諦めて出てきなさい

「貴方は完全に包囲されている、諦めて出てきなさい」
ぜって～出てくか。と木の上からクズ野郎の門番を見ながら、居場所がばれるので声はださなかった。
「どうしてこうなったかな～」そんなことを考えた

「あのままでは、私目（ワタクシ）の大きな失態になるところ、女神のような自愛によって助けていただき、まことに本当に感謝します」
このパーティー主催者のクズ野郎に感謝されたが正直どうでもよかった。
「あまり気にしなくていい、少々目立ちすぎたからな、今日は帰るよ」
そう言いながら帰ろうとする
「いえ、御礼もせずにこのまま恩人を帰してしまっては名折れ、お待ちください」
「いや、そんなものいいって」
「だが目立ってしまってるのも確か、部屋を用意しますのでそちらでお待ちください」
もう一度同じセリフを言おうとした時、ガシっと両腕をつかまれた
「お父様お母様！？」
「何を帰ろうとしてるの、ちゃんと受け取らなければ相手に失礼というのもなのよ」
「そうだぞ失礼というものだ。で、どちらにいけばいいのかな？」
「まて、まてって」
が両親は無視して両腕を抱えたまま案内するメイドをの後を追う。
「ココです」
「近！！」両親を説得する時間も逃げ出す時間も与えてくれなかった。

無理やり両親に部屋に押し込められ扉が閉められ、ガチャンとカギを閉められた。
「って、カギ！？何故閉める！？」返事は無い、ただの扉のようだ。
「ていうか暗！！」
部屋の照明がついてないみたいだった。
窓の方が月明かりで明るいのでそっちに寄る。
「お待たせした」
「早」クズ野郎が扉を開けてはいってきたが手ぶらのようだ。
「で？お礼の品は？正直いらないが、それさえもらえば帰っていいんだろ？」
「ああ、先ほど妻に手紙を書いて送った」
「それがお礼と品とどういう関け「三行半で」三下半（ミクダリハン）！？」クズ野郎が近づいて来る。
「コレで私は一人身だ、貴方を私の妻に迎えよう」
「マテやコラ！てかよくみたらココ寝室じゃね～か！！」暗さになれた目が大きなベットを見つけた。
「これで貴方も伯爵家の一員だ、両親もお喜びだろう」
「いや年の差考えろや」お父様とかわんね～ぞ
「愛に年の差なんて」といいながらなおも、ゆっくり近づいてくる。
「・・・・・・」差し迫る恐怖に背を向け窓を開けながら月を見る。
あ～月が大きくてきれいだな～
「わかった、両親に伝えてくれ」
「ああ、今日からは私の親でもあるからな」
「先に家に向かうとっ」と言いながら窓から身を投げた。
「な！」
着地の後、出てきた3階の窓を見上げるとクズ野郎が顔を出していた。
「帰り道に自信が無いから、着くのは少し遅れるかもとも伝えておいてくれ」
そういいながら立ち去ろうとすると上で

「門を閉めろ、絶対に逃がすな！！」
そんな声が聞こえたので全力で門の方へと走った。

第二話　田舎の母ちゃんも泣いてるぞ、諦めて出てきなさい　（後書き）

三下半（ミクダリハン）・・・・離縁状の俗称である。

本当はもっと早く完成させる予定でしたが、少しでもちゃんと書こうとすると手が止まりますね。
なので展開とギャグさえ伝われば、って感じで諦めに似た感じでかいちゃってます。（ダメだろそれ）
でも気晴らしの作品なのでこんな感じの状態で上げて行きます。
いや、色々直したいところは多いんですけどね～。
時間がかかりそうなのでコレで我慢してください。
一応、この話が完成して、希望が多くて時間があれば手直ししていくかも

第三話　薬屋無エ、映画も無エ、たまに来るのは、紙芝居。俺らこんな国いやだ

第二話と第三話は一つに纏めて、タイトルはこれの予定だったので「俺ら東京さ行ぐだ」を聞きながら両作品書きました。あと、二番にしたのは、バスが来てなさそうだったからです。

第三話　薬屋無エ、映画も無エ、たまに来るのは、紙芝居。俺らこんな国いやだ

「お前の愛のために、俺様は負けるわけに行かない」
セリフはカッコい～けど状況最悪だから。今にも飛び掛ってきそうな周りにいる兵たちも解っている事なので言わなかった。
「どうしてこうなったかな～」そんなことを考えた

「貴方は完全に包囲されている諦めて出てきなさい」
木の枝の隙間から門のほうを見ると、ガッチリと閉められた門に５人ほどの門番がいた。
ん～ん突破は無理かな・・・
「せめてドレスでなければ・・・」突破も可能だろう、いや適当な場所から塀を越えればいい。いや、そもそも、門を閉められる前に出られただろう。
が、できたことと言えば木登り程度であった。
「最悪・・・・」は～　と下にため息をつきながら言うと目が合った・・・・
「いたぞ～」ギャーーーーー
一瞬にして木下に人が集まる。半径５０ｍくらいの包囲網をしかれた。
「多すぎ、って上ってくる！！！」
「っく、秘儀、八艘飛び」
「ぎゃふ！」
「たわば！！」
「ひでぶっ！」
「あべし！！」
「あ、あ～ん！！」
「も、もっと～！」
「き、気持ちいい！」

「イクッ！」
包囲網の端に何とか着地し、逃走を開始する。
後方で「女王様～」と、顔に足跡のついた８人の声が聞こえたような気がして、力の限り逃げ出した。
ダダダダダ！！！！！
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドド！！！！！！！！！！！！！！
うわすっげ～追ってくるんですが！！
「って、危ない！！」前方に人がいた。
自分が避ける分には大丈夫だが、問題は後ろから追ってくる群れだ。
「っく！！」
その人捕まえ、一緒に真横へと飛んだ。
何とか躱す事はできたが体制を立て直すところには囲まれていた。
「っち」諦めて戦う姿勢を取ると、
「何事だ！！」ッと後ろから叫ばれた。
「陛下！！」追ってきてたのか、クズ野郎が兵を掻き分け、先ほどかばった後ろの奴にそう言った。
「すみません、うちの妻が逃げ出そうとしたの、でそれを止めようと」
「はぁ～？いつの間にテメーの妻って事になってんだよ！！俺は認めてね～ぞ！！」
「前の妻とも別れた、君の両親も納得している、何も問題なかろう」
「俺がい・や・だって言ってるんだよ！！」
「その通りだ、諦めろ」っと後ろで陛下が言ってくれた。
さすが国王！！アンタ最高だよ。いい事言う！！
「この娘は俺様の妻にするからな！！」
ダメだこの国、早くなんとかしないと。
「何でそうなるんだよ！！ぜんぜん脈絡なさ過ぎだろ！！唐突過ぎんだよ！！ストーリーとか、展開て物なめてるだろ！！」
「俺様が気に入った、だからお前を妻にする」

バカ国王だった。たぶん国一のバカだろう。
「・・・わかった、婚姻の条件を出してやる」
と言いながら拳を握り直す。
「俺より強い奴、俺を倒せたら考えてやる」
そう言った。
「倒せばいいんだな、国王だ、強くて当たり前だ！！」
っと国一バカが言った。
「どう、したかかって来い」
と言ったので
国一バカの腹に拳を入れてくの字にのけぞらした。
それに少し遅れることドンっと音がした。
「手加減はした」
膝を着いて、見上げていた。
「お前もやるか？」そうクズ野郎にも言った
全力で首を左右に振った。
「倒せばいんだよな」
そういいながら何とか国一バカは立ち上がる。バカなだけに、思った以上に丈夫だったらしい。
「国王の命令だ！お前たち、この娘を取り押さえろ！！」
周りにいる兵たちに言った。
一対一じゃね～のかよ！！

第三話　薬屋無エ、映画も無エ、たまに来るのは、紙芝居。俺らこんな国いやだ

ｏｒｚ

脈絡なくて、唐突過ぎて、ストーリーとか、展開て物なめてるような作品でごめんなさい。

そんな作品なのに評価ｐｔ入れてくれたかた、お気に入り登録してくれた方、ありがとうございます。

一応、今後の予定として、土日あたりには次の投稿予定を立ててます。

ま～展開は最後まで決まってるので、無理じゃないはず。問題は質なのでそこをがんばります。

謝罪話　謝ってすんだら警察はいらないだよ　（前書き）

この話は本編とは関係ありません。
読まなくても、本編には全く差し支え無い内容です。
もっと別の形でのやり方もあったのかもしれませんが、まだ投稿サイトの使い方がわかっていなくこのような形になりました。

謝罪話　謝ってすんだら警察はいらないだよ

「土日に次の投稿するって、土曜日じゃないのかよ！！てか日曜も微妙だって！？」
ほんと～うに申し訳ございません。そう言ったが多くのブーイングのせいでその声はかき消された。
「どうしてこうなったかな～」そんなことを考えた

作者です。そんなに多くのブーイング来るほど読んでる人は少ないと思いますが、もう一度ココで謝罪します。
「本当にすみませんでした」
さて、ココからは作者として喋っててもつまらないのでゲストを呼んで任せることにします。
「って、あの野郎逃げやがった！！しかたねえ、俺は『不幸な？姫の？物語？』で主人公してる、名前は・・・・」
「そんなもの無いですよ？」
「そんなもの無いって！？てか誰だてめ～！？」
「始めまして、名前が無いのは、そんなにキャラを出す予定がないので名前必要ないだろうと、あと貴方相手の名前を呼ぶようなキャラじゃないでしょ？あと私は、貴方の登場作品のあらすじで少しだけ紹介されてる、原作？の主人公をやっています」
「なんでテメ～が来てんだ？」
「理由は二つ、一キャラで話し続けるのは無理なのと、貴方の作品からゲストに呼べるキャラが他にいないからです」
「・・・まともなの出てきてね～からな」
「そんなわけで私が呼ばれたわけです。ちなみに私も名前がないんですが」
「なんだ俺と一緒か」

「いえ、私は思案中で貴方は予定ナシです」
「作者テメ～戻ってきやがれ」
「まあまあ、ちなみに私の名前は読者の方が考えてもいいとの事、ファンタジー系の名前で苗字など要らなく、名前のみだけらしいです」
「何宣伝してやがる、お前も！！」
「いえ、あそこにカンペが」
「あるよ、ってかこの字作者の字じゃね～か？」
「ですね、あ、次のページにも何か書いてありますよ」
『そろそろ無駄話してないで進めて、進めて』
「しかたね～進めるぞ。そもそも今回はこんな話をする事になったきっかけの切っ掛けの次の話の進み具合はどうなってるんだ？」
「９割？くらいらしいです」
「もうすぐじゃね～かこんなの書いてね～でさっさと書き上げろ！！」
「いえ、性格には４割くらいです」
「は～？９割がどうして４割になる！！」
「それはですね、今書いてる部分が結構長くなってるため、半分にしようか、長いままにするか悩んでるんです」
「それで半分で９割、長いままだと４割な訳か、土日投稿の宣言したんだ半分でいいだろ！！」
「それがそうもいかないんですよね、この作品のある意味メインってなんだと思います？」
「俺の、カッコイー活躍」
「違います、貴方の口癖がメインです」
「口癖？そんなものねーぞ？」
「『どうしてこうなったかな～』ですよ、今回も言ってるでしょ？」
「いや今回は作者が言ってるんだが・・・」
「とにかく、半分にするとそれが、不自然になりそうで困ってるそうです」

「そもそも俺はあんなセリフ言いたくないんだが・・・・」
「それはどうでもいいですが、それに煮詰まってるため、とにかく一度長いまま完成させて、分割するか考える予定だそうです」
「どうでもいいって・・・、テメー可愛い顔して色々言ってくれるな！！」
音を置いていく拳でボディーに入れる。
が、体に当たることなく拳を軽くいなされ地面へとダイブしそうになり、前転で何とか回避。
「可愛い顔って、貴方だって綺麗ですよ。あと貴方の方が力は上ですが、戦えば私が勝つだけの才能を持ってます」
「なら試してや『ガン』・・・」
金タライが落ちてきた
「タライのなかに紙が『猪バカはほっといて進めて、進めて』そうですね。完成予定は日曜の予定ですが、予想外の事や、分割時の最初の部分を考えるのに手間取ると微妙な感じになりそうです」
「・・・・・・」
「まだ気絶してる、こんなんで、主人公務まるのかしら。作者としては、がんばって日曜日にあげて、
アクセス解析の反応見たいらしいので、死ぬほどがんばってもらいましょう」
「ん・・・・あ？」
「起きたわね、暴れないでよ？さっさと話し進めたいんだから」
「なっとくできな『ガン』あぶな」
目の前にもう一個落ちてきた
「解った、解りました。でもさっきも言ったが、こんなの書かないで本編書いたほうがだろ？」
「理由は二つ、気分転換と、長い文章の時の反応が見れればいいかな思ったからだそうです」
「長い文章？」
「そうです、今までの話と比べると結構長くなってるんですよ？」

「本編より長くなってるって・・・」
「そうですね、ですが今書いてるのは、これくらいかもうすこし長くなる予定もあるので悩んでるらしいです」
「いや、そもそも、作者の作品短すぎただけってのもあるが」
「確かにそうですが、ある意味そういう作風って意味もあるんです。確かに、長文書くのが苦手だって話もあるそうですが」
「苦手だってだけじゃね～のか？」
「・・・その比重は大きいらしいですが、割とこの作風気に入ってるらしいです」
「ムチャさせて失踪されても困るからな、しかたね～」
「以上が遅れる理由だそうです」
「ちなみに、あとどのくらいで俺の話は続くんだ？」
「１０話行けば良い方だそうです」
「みじか！！」
「最初の予定は５話くらいだったので、がんばった方ですよ」
「・・・・」
「そろそろ切り上げろとカンペも出ましたね」
「っく色々言いたいが仕方ない」
「これから作者に鞭を打って頑張らせますので、少々次の投稿をお待ちください」
「いやむしろ今から殴りに」
「投稿の時間遅れたらどうするの」
「ッチ、寝ずに書かせておくので少し待ってくれ」
「「それでは、ココまでお付き合いありがとうございました」」

謝罪話　謝ってすんだら警察はいらないだよ　（後書き）

今回出てきたキャラの性格は、少し崩壊しています、気にしないでください。
また、この話は直接書いてるため、誤字など多いかもしれません。
それも含めて「もうしわけございません」
頑張って間に合うよう努力をします。

第四話　Ａ３用紙を十回折りたたんでみてください（前書き）

この作品で出てくる物理法則は正確でありません、雰囲気でお楽しみください

第四話　A3用紙を十回折りたたんでみてください

「陛下は女好きなんですが、まだお子が生まれてないんですよね～」
そんなもの俺に期待するんじゃね～！！が、全身を縛られ、口はふさがれているため、抱えている親衛隊には、その声は伝えられることは無かった。
「どうしてこうなったかな～」そんなことを考えた

「お前の愛のために、俺様は負けるわけに行かない」
そう言ってはいるが、兵のやるきは微妙だ。このスキをついて
「そこで気絶してろ～！！」
国一バカを倒そうとするが
「我ら、親衛隊。陛下をやらせはしな！！」
庇った一人を吹き飛ばしたが間に何人も入られて狙えなくなった。
ならば一点突破で！！
「一番外周のものは肩を組め、包囲網から逃がすな」
「ッチ」
国一バカでも国王は国王か、的確に指示してる。
「数で押していけ！！」
そうして前後から二人が同時に攻撃してくる。
「はっ、連華（レンカ）」
目の前の相手に向かって進み、体にひじを曲げたまま、力が斜め下方向に行くように当てる。
それを入れるとほぼ同時に近い瞬間で、曲げていた肘を伸ばし裏拳をいれ、吹き飛ばす。
そしてその力を利用し後方の兵に向かって飛び拳を入れる。
国一バカを倒すような攻撃は手加減が難しくて使えない。
「なら倍の数だ！！」
そういうと今度は四方から来る。

少し前に出て前方の兵の腕を掴み、マタドールにでも成ったかの用に後方から来る兵に向かって分投げた。
投げ飛ばす時に向きが変ったため、右に居た兵が正面に見える。
一歩前に出ると、先ほどのこともあってか少し下がった。
が、予想どうり、踏み込んだ足は後方に飛べるよう、横にして出していた。
そんなのも知らず最初に左に居て、今は自分の後方に目がけて突っ込んでくる兵にを使って連華を放ち、全員を倒す。
長いスカートのおかげで、足の動きが見えないので騙しやすい。
「ならばさらに倍だ！！！」
今度は８人、普通にやっては無理だ。足技なら範囲を広く攻撃できるがスカートのせいで使えない。
「ならば、奥義、連華　咲」
さっきまでは、二撃目は拳を叩き込んでいたが、今度は一撃目と同じ肘から入れていく。
そして後ろの敵ではなく斜め後ろの敵に向かって放つ。
前、斜め後ろ、前、斜め後ろ、と一つずつずらして行き、加速していくその攻撃で、八つの花びらが咲くように、兵を吹き飛ばした。
数での押し切りは無理なのか？と兵に動揺が走り二の足が踏まれた。
「落ち着け！！、その攻撃は受ける側の足が地に着いてなければ使えない。さらに倍１６人で押しつぶすように飛べ！！！！」
「ッチ」
ばれた、連華は肘の攻撃の時に斜め下に入れることで、相手を壁に見立て、反動を利用して加速してゆく技だ。
足が地に付いてなければ加速できない。
「くそ、怪我してもしらね～ぞ！！」
飛んできたうちの一人を、掴み引き寄せ
「歯～食いしばれ」
そいつに、死なないギリギリの加減で、上から押し潰そうとしに来る兵たち目掛け吹っ飛ばす。

殴られた兵が連鎖的に他の兵も吹き飛ばしていく
「いいぞ、このまま数を増やして押しつぶせ！！」
「くそ～～～！！」
１０回目の突撃で完全に捕まってしまった。
「どこに居たんだよ、こんな兵の数！！」
「近隣から急いでかき集めさせた」
よくみればまともに兵の格好をしてる者は少なかった。
「こら、離せ、縛るな、変なとこ触ろうとするんじゃね～！！」
全力で抵抗するが完全に縛られる
「こんなの認めね～からな！！」
「国王の俺様が決めたのだ諦めろ」
「諦めるか～～～～～～～～！！」
が、口をふさがれ、もう声を出すことができなくされた。

第四話　Ａ３用紙を十回折りたたんでみてください（後書き）

なんとか間に合いました。
でも長さは半分にしたけど、完成してた前半じゃなくて、全く書いてなかった後半部分と順番変えたので・・・・もうダメ、寝ます。

第五話　神様お願いです、これ以上何も望みません、一生のお願いです、お願い

ココから急展開、本当は色々伏線立てて違和感無くするべきだったんだろうな。
ただこの作品は、原作？があってその作品のＳＳみたいな物なので、作者としては予定どうりの展開なんですよね・・・。

第五話　神様お願いです、これ以上何も望みません、一生のお願いです、お願い

「その嫌がる声を、俺様が快楽の声に変えてやる」
い～～～や～～～。という声は足先からのぼって来る国一バカの感触に恐怖し出なかった。
「どうしてこうなったかな～」そんなことを考えた

「陛下は女好きなんですが、まだお子が生まれてないんですよね～」
親衛隊はそんなことを言いながら自分を部屋に運ばれ、ベットに置いて行かれた後、入れ違いに国一バカが入って来た。
「人払いは済ませている。助けを呼んでも無理だぞ」
そんな、完璧に悪役のセリフをはいて近づいてくる国一バカを見て、体感時間の延長とともに、こうなった一番の原因を考えた。

そもそも自分はこの世界の住人でなかった。
目が覚めたら見知らぬ天井・・・・も無く、空だった。
「どこだココ？」
「天国じゃ」
「・・・」
「天国じゃ！！」
「オヤスミ」
「ねるんじゃな～い」
「ッチ」
「残念ながら夢じゃない、現実じゃ」
「アロハにウクレレ持った爺に言われて信じられるか！！」
「さんしんのほうがよかったか？」
「沖縄かよ！！」
「諦めろ、おぬしは死んだのじゃ」
はっきり言ってこいつの格好で、雰囲気どころか信用性が全くない

が、裸足なのに踏んでる感じのない足元の雲、果てが見えない世界、たぶん本当だろう。
椰子の木と海が書かれたパネルが見えたが、気にせづ話を進めることにした。本当だよな？
「で？アンタ誰？」
「神じゃ」
あ～言っちゃったよ。話の流れからしてその可能性を全力で否定してたのに。
「神様じゃ」
聞こえなかったと思ったのかもう一回言った。てか様までつけたよこのオッサン。
俺の中の、（想像していた）神は死んだ。
「で？神様（仮）が何用？」
「ん？なんか引っかかるような言われ方をしたような・・・まあいい。今回おぬしは予定外で死んでしまったので、お詫びとして別世界に転生してもらう」
「ちょ、ちょ待って！！」
「不満か？身体能力などのもろもろ強化付きじゃぞ？夢と魔法が詰まった世界じゃぞ？」
「いやその前に予定が言ってどういう事だよ！！」
「あ～そのことか。そもそもおぬしどうして死んだか覚えておるか？」
「確か・・・・子供が引かれそうになるところをかばった？」
「そうじゃ」
「で、予定外って事は何か？本当はそんな事故は起きる事なかったとか？」
「微妙に違う、あの事故事態は起きるのは決まっていたが、誰も死者が出る予定はなかったのじゃ」
「つまり俺は死ぬ予定でない子供を庇って死んだと？」
「いや、あのままでは子供は死ぬところだったのじゃ」

「？？？」
「ま～解らんじゃろう、順追って説明しよう。そもそもあの子供の家計は神の信仰が厚くてな、そんな者には布教活動の一環として、奇跡で助けることがあるのじゃ」
なんという現金な神様（仮）だ・・・・
「で、あの子供の事故も奇跡で助ける予定じゃったのだが・・・・」
「だが？」
「ちょ～っと余所見をしていてな～」
「な！！」
「で、奇跡は間に合わなかったのだが、おぬしがうまく助けたわけじゃ、ナイス！」
親指立ててそんなことを言われた
「じゃあ何か？てめ～の余所見のせいで俺はしんだってのか！？何みてたんだよ！！」
「おぬしじゃ」
「は？」
「おぬしがあまりにも美しくてな～見とれてしまってたのじゃ。ある意味自業自得じゃな」
またなのか、またこの容姿のせいなのか？！
「何が、ある意味自業自得だ！！」
怒りに任せて神様（仮）の顔面目がけ、右足の上段蹴りを放つ。
身体強化されてるらしくものすごい速さで顔面に向かっていくが、少し後ろに下がるだけで躱そうとしていたので、さらに力をこめて振りぬく。
が「神様にそんな攻撃、効くわけないじゃろぉお？！！」
と左の踵が入った。
右足に力をこめて振りぬく瞬間、躱されたため顔前を通りすぎるので、それに合わせて左足も踏み切り、死角を通しながら頭上へそのまま体を捻りながら落としていたのだ。
「ま、ま～そんなに痛くはないんじゃがな」

ちょっと涙目だった。
が、すごいプレッシャーをかけられたのでこれ以上はしなかった。
「その力、強力過ぎるので、調整をきおつけるのじゃぞ」
「とにかくおぬしの死は予定外じゃったので、蘇生したいが元の世界に戻しては色々問題があるのでな」
「それで別世界か」
「そうじゃ、おっとおぬしの無駄な運動のせいで時間がない一気に説明するぞ」
「おぬしの行く世界は、中世ヨーロッパ風の感じで、そこの貴族の行方不明になった子供として転生してもらう。幼少の頃分かれてしまったので姿のもんだいはないじゃろ。それにその子供にあった特徴的な腕のアザを再現しておいた。それをみれば信じるじゃる。あと、世界観など色々わからないじゃろうから、説明してもいいが時間がない、記憶喪失って事にしておくのじゃ。こんなところかな？」
「ちょっと待て行方不明って、本物の子供は？」
「残念ながらその娘は死んでいる」
「ちょ、娘って！！」
「お、時間じゃな」
体が光に包まれ、透けていく。
「まて！」
「そうそう、おぬしもうちょっとその口調直した方がいいぞ」
「だから待てと言ってるだろが！！」
その声むなしく強い光を発して、その場から消えたのだった。
「ん？なんじゃ？？」

そんな走馬灯を見た。
てか俺これから死ぬの？
いやある意味死ぬよりいやな事になりそうだけど。
そんな事を考えてる時、ふさがれていた口はいつもどうりになり、身動き取れない自分の足先に触れられ、相手の顔が自分の顔に近づ

いてきた。

第五話　神様お願いです、これ以上何も望みません、一生のお願いです、お願いです

「おめでとうございます、ＰＶ５０００越えおよび、ユニークが１５００になりました」
うそだろ！？。そう言いたかったが、確かにそう表示されている数字を見て声も出なかった。
「どうしてこうなったかな～」そんなことを考えた

投稿の間か空いてしまってすみませんでした。
それにしても少しいない間にこんなに伸びてるとは・・・読んでくれてる皆様、本当にありがとうございます。
こんな作品を５０００回も読まれてるなんて・・・。
ちなみに、普通なら１万くらいでこういう文を書くのでしょうが、正直そろそろ終わるのでそれまでに達成不明なのでこんな早い形になりました。

次の投稿ですが少し空きそうです、お盆から一週間くらい忙しそう・・・
がんばって書きたいんですがね。
もしかしたら、箸安め感覚で、下らなく短い物を、この作品とは別に書くかも。

第六話　女性が恋をして綺麗になるのは女性ホルモンが関係しているらしい（前）

ずいぶん感覚があいてしまったのに少々短めです、申し訳ございません。

そもそもこの作品の大筋を思いついたのは今年、続編？として発売したゲームをやって、その主人公の設定が使いやすい事に気づいたから、書き始めました。
ちなみに今回はそれに出てくるキャラ、香織理のテーマ曲を聴きながら書きました。個人的には一番好きなキャラでしたね。
曲といえば同じ時期に発売したバイオリニストのロックのゲームが好きですが、この作品に合わないので聞きながら書く事ができなくてがっかりです。

第六話　女性が恋をして綺麗になるのは女性ホルモンが関係しているらしい

「コロス、コロス、ぜって～コロス。チリも残さずコロス！！」
俺様を殺したら色々な人に迷惑が・・・そんな一般論を口にしても、
気にしないであろう怒りを内包した怒りで目の前の人は立っていた。
「どうしてこうなったかな～」そんなことを考えた

「その嫌がる声を、俺様が快楽の声に変えてやる」
そんなセリフと足をのぼって来る感触、迫り来る顔面に一瞬声が出
なかったが、何とか振り絞る。
「テメ、やｍｅんん・・・・・」
・・・
・・・・・・
「・・・んんんののおおおお！！」
怒りに任せた風は二人の距離を突き放した。
「今なんか軟らかい？」
くくくくくく、くち、くち、くち、くち、くち！くち！！
「風？？魔法？？？」
おおおおおお、おと、おと、おと、おと、おと、おとこ、おとこ、おとこ
！おとこ！！おとこが！！！
「ばかな、奴を縛ってる縄は魔封じの効果が」
おれのくち、おれのくち、おれのくち！おれのくち！！おれのくち
に！！！
「な！、縄が切れてる！！」
ふれた！あたった！おしつけられた！なめられた！
「今まで一生懸命守ってきた俺のくちをおおおおお！！！」
生前？俺は早くに母が亡くなった為、父と二人で暮らしていた。
片親ながら、しっかりと俺の世話をしてくれた父は、良い親だった

と思う。
だが二つ、二つだけ許せない事がある。
一つは高校の頃、俺は容姿のせいで、異性からイジメにあっていた。
が、同性はそんな俺をかばってくれはしたが、そのせいで異性からは完全に嫌われ、イジメはエスカレートしていった。
どんどん大きくなったイジメは父に隠し切れなくなり、最終的に共学の高校から転校させられた事が許せなかった。
転校数日はまだ問題にならないレベルだった。
学校のみんなは俺に対して良くしてくれた。
教科書を見せてくれたり、消しゴムを忘れたらくれたり、学食で席を譲ってくれたり、通勤電車で痴漢から助けてくれたり、食事を奢ってくれたり。
が、みんなの気持ちは、いつしか友情から飛び出て、愛情に変っていった。
もちろん俺には同性愛者でないので拒絶したが、力ずくで手に入れようとする者たちが現れ、そんな者たちを、千切っては投げ、千切っては投げ。
学校一などと呼ばれていたのも倒したせいか、他校からの人たちも挑戦してきた。
挑で来る人たちの決まり文句は「勝ったら付き合ってください」である。
いつしか周辺の高校を制覇し乙女番長と呼ばれていた。

そうやって守ってきた俺のファーストキスをコイツは!!!
「ゆるせない、ゆるせない、ゆるせるものか!!」
「それにさっき触った軟らかい感触・・・、まさか!!」
もう一つ父の許せない事
「お前。その容姿で男か??!!!」
あなたの遺伝子、男性ホルモンが極端に弱すぎです。

第六話　女性が恋をして綺麗になるのは女性ホルモンが関係しているらしい（後

※捕捉　最初のタイトルコールは陛下がしています。

「一人称が俺なのになんで女だと思ったの？」

いや、わざとそう思わせるように書いてたんですけどね。気づいた人どれくらいいたかな？

女装主人公はある意味書きやすいです。

主人公は最終的に強い感じ、チートになったりしますが、強すぎるキャラは嫌われます。

なので色々、弱点や暗い過去などを持たせて±０にしたりしますが、女装主人公は存在自体が－ステータスです。

一見して、容姿がいいとか＋のステータスですが、男として認められないなど、一方向のステータスになるので、一見すると最強の主人公とかになっても問題なくなります。

さて、次回あたりで最終話の予定です。

といっても、長すぎる、区切りが悪い、などで半分になったりする可能性も否定できません。

忙しいながらも、いや忙しいからこそ？全く別な話の設定が浮かんで、いくつかメモしてたのでそっちも書きたいな～。でも、原作が進んでないのよね・・・。

「最終話」　いやこれで終わりってダメだろ。だが、そんなセリフは作者権限で

日数をあけてしまってすみませんでした。
そのせいか、おかげか、ＰＶが１万超えて現在１万３千、ユニークも４千。
そんなにもこの作品を気にしていただけて、感謝感激です。

今回の話ですが本当ならもっと伏線をたてて違和感ない展開にしたかったけど・・・原作があってのこの作品ですから無理やりこの展開になりました、すみません。

「最終話」　いやこれで終わりってダメだろ。だが、そんなセリフは作者権限で

「コロス、コロス、ぜって～コロス。チリも残さずコロス！！」
どうせ男とばれたんだ、この国に居場所なんてないだろう。
こんな国、目の前の奴を殺してさっとおさらばだ。
「や、やめ！」
右手に集まった魔力を全力で投げ飛ばした。
「死ね～～～～～」
魔力は巨大な風の壁となり国一バカを壁へと叩き付け続ける。
「うわあああああああああああああ」
周りの壁は少しへこむがその程度の威力。
そして国一バカに当たる風は、小さな隙間ができるようになっている。
「あああああああああああああああああ『パリン！』」
その隙間は、風の流れの隙間ではなく、風のない真空となり、無数の刃となって襲い続ける。
「きゃあああああああ～～～～」
「え？」
国一バカを守っていた？外装のような物が弾けて魔力で起した風は打ち消された。
風によって叩き付けられていた体は、その力を失いそのまま床へと倒れこんだ。
そして駆け寄って確かめるが、そこには気を失った一人の女性が居るだけであった。
「なんで？」
気絶した女性をベットに運んだが、まだ起きる様子もない。
「何が一体どうなってるんだ？誰か説明してくれよ」
そう、誰に言うでもなく、独り言をつぶやいた。

「ならワシが教ｅ『ドーン』」
いきなり現れたアロハの爺を全力で殴り飛ばした。
持っていたさんしを置いて、国一バカを叩きつけていた壁の方へ飛んでいく。
先ほどの攻撃のせいで脆くなっていた為か、その体を受け止めることなく、崩れ去っていった。
崩れた壁のガレキとともに隣の部屋の壁に叩きつけられた。
「い～所に出てきてくれた。ちょっと説明しやがれ」
近づき、少し瓦礫に埋まった体を左手で胸倉を掴んで引きずり出す。
「ちょ、ちょっと待つのじゃ、セリフと行動が間違ってるぞ」
どうやら振り上げた右の拳の位置が納得できないらしい。
「なに、どうせ俺の攻撃はそんなに痛くないんだろ？説明のついでにストレス発散のために手伝いやがれ」
「まて、待つのじゃ。今のおぬしの攻撃は洒落にならん、色々問題もあるのでやめるのじゃ」
「あ～ん？」
しかたないので、左手を離し、というか床に叩きつけ、仰向けの体勢の神様（仮）の腹の辺りを軽く踏みつけ、逃げられないようにする。
靴がヒールだったので踵が少しささり「グエ」っと声が聞こえた気がしたが無視する。
「で？なんだ？さっさと説明しやがれ」
「何でこんな体せｉグエ。わかった、わかったのじゃ、説明するのじゃ」
「よいか、よく聞くのじゃぞ。おぬしの力は条件がつけられて強くなっておる。はっきり言うとじゃな、純粋な力で言えばわしより強い。じゃが問題は条件じゃ、その力の反動で極度の虚脱状態になり指一本動かすのも困難な状態になる。もちろん魔力なども扱えない」
「な！さっさと戻しやがれ！！」
そう言いながら足に力がこもり思いっきり踏みつけていた。

声を出せず必死のジェスチャーでやめるように指示したのでしかたなく力を緩める。「ゴフ、ゴフ。ほんとに洒落にならん力じゃ、魔力で守っておるのに、それを貫いてくるとは」
「よいか、おぬしの力はわし以上じゃ。残念ながらわしの力で戻す戻さないの問題じゃない」
「なんでこうなったんだ！！」
「おぬしがムリして魔力を使ったからじゃ。おぬしを縛っていた魔封じの縄はおぬしの力では切れないのじゃ。じゃが怒りに任せて魔力を使い、他者から力を奪う事でそれを可能にしたという事じゃな。しかしの、その力を奪う時に使ったラインが定着しそのためにそのものから一定以上、およそ１ｋｍ離れると先ほど言ったような状態になるのじゃ」
「そんな・・・」
さっきのアレのせいでこんな事に・・・・・ちょっとまて？
「魔封じの縄とか、怒りに任せてとかの時にラインがって・・・」
「そうじゃおぬしとラインが繋がったのは、今おぬしの後ろにいる奴とじゃ」
「な！！」
全力で振り返るとそこには先ほどベットに運んだ女性が立っていた。
「ほう、それはいい事を聞いた」
「何がいい事なのか知らないが、お前誰よ！！」
「なんださっき俺様とあんなにも熱い口「ぶぼら」付けをしあった仲ではないか」
ききたくないセリフを言おうとしたので力ずくで止めようとしたら、足の拘束を解かれた神様（仮）がかばって代わりに殴り飛ばされていた。
「ま、待て、待つのじゃ。そ奴を殺しても条件に引っかかる。やめるのじゃ」
「ッチ。というかお前、なんとなく予想つくが誰だよ」
「もちろん俺様はこの国の国王だ！」

だよね、さっき「俺様」って言ってたあたりで予想できたけど。
だけど信じられない、というか信じたくない。
「見た目が変わったのは魔力で変えていたのだ。強力な防壁としての効果もあるのでお前の攻撃も気絶程度で済んだわけだね」
そんな、さっきので死んでいればよかったものを・・・
「そんな、俺はこれからどうすればいいんだ・・・」
「そんなの、俺様の妻になればいいだけだろ」
「何故そうなる！俺は男だぞ！！」
「ま～確かに、男は嫌いだが・・・」
そう言いながら、舐めるように俺の姿を見る。
「アリだな」
「何がアリだ～！！」
反射的にぶん殴りそうになるが
「いいのか？俺様を殺してしまって」
そのセリフに動きが止まってしまう。
「妻にするというのも、お前の事を考えてだぞ？国王である俺様と常に一緒にいるなどなかなか難しい。だが妻になれば常に一緒にいることは何とかなるだろう」
確かに・・・だが・・・
「不満か？でもいいのか？俺と離れてば指一本動かす事も出できない美女、そこに通りかかる男たち・・・・」
「やめ～～～～、そもそも俺は男だ！！」
「誤差の範囲で済まされるだろう」
ずいぶん大きな誤差の気がするが、高校時代の黒歴史を思い出し否定できなくなった。
「それに周りが子供はまだかと言われてなかなか困っていたのだ、ちょうどいい」
そりゃ女同士じゃ子供できないから困るよね。
「いやいやいや、ちょっと待て。そもそもあの爺もいる、っていつの間にかいない！！」

「そいつなら、さっき手を振りながら消えていったぞ。さあ、諦めろ」
「い～～～や～～～」
抵抗したいが、力加減を間違って殺してしまっても困る。そもそも高校時代のイジメのせいで、あまり女性に強く出れない。それとも遺伝か？
とにかくまともな抵抗をする事は出来なかった。
「どうしてこうなったかな～」

「最終話」　いやこれで終わりってダメだろ。だが、そんなセリフは作者権限で

このような作品を最後まで読んでいただきありがとうございます。
え？コレで終わり？って思うかもしれませんがコレで第一章は終わりという事になります。第二章を書く予定はあんまりないんですけどね、そもそも展開考えてないですし。
今後の予定ですが、原作を裏で書き溜める作業をやりながら、「本当なら連載可能なお話だけど、連載２本も抱えるなんて無理だろ」そんな理由で短編にまとめてる作品を投稿して、気が向いたら「姫様ニート」の方を書いていこうかと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5728m/

不幸な？姫の？物語？

2010年10月13日19時16分発行